



ダラ・バーンバウム[テクノロジー/トランスフォーメーション:ワンダーウーマン] 1978-79年 courtesy of the artist and Electronic Arts Intermix (EAI), New York.

Vital Signals

映像フェスティバル
2010
[ヴァイタル・シグナル]
Japanese and American Video Art
from the 1960s and 70s

日米初期ビデオアート上映会 — 芸術とテクノロジーの可能性 —

2010.2.5 Fri ▶ 2.7 Sun 入場無料

北海道立近代美術館 講堂

主催：北海道立近代美術館

協力：ELECTRONIC ARTS INTERMIX



横浜美術館



特別協賛：アメリカ大使館



P R O G R A M

2.5 Fri

Section 1 テクノロジー
新しい視覚言語

10:30 ▶ 約57分 10作品 program a ビデオ言語論

14:00 ▶ 約80分 9作品 program b 拡張する形式

2.6 Sat

Section 2 オルタナティブ・メディア
コミュニケーションの変容

10:30 ▶ 約82分 8作品 program c テレビの解放

14:00 ▶ 約48分 7作品 program d 共有される記憶

2.7 Sun

Section 3 パフォーマンス
行為の記録、身体の記録

10:30 ▶ 約74分 8作品 program e ビデオと行為

14:00 ▶ 約64分 8作品 program f ビデオと身体



●交通案内●

地下鉄＝東西線・西18丁目駅下車④番出口から徒歩5分
バ ス＝道立近代美術館前バス停下車、徒歩1分（JRバス、中央バス）

※美術館駐車場ご利用の方は駐車料金が割引になります。お問い合わせは北海道美術館
協力会駐車場：TEL080-3266-1003まで。

北海道立近代美術館

〒060-0001 札幌市中央区北1条西17丁目 TEL 011-644-6882 FAX 011-644-6885
http://www.aurora-net.or.jp/art/dokinbi/

実験映画ではない、 もうひとつの映像文化史の源流へ——

「ビデオ」が登場した1960年代。アーティストたちは、すぐにこの新しいメディアを用いた探究のなかに身を投じました。世界の芸術文化の中核であったアメリカ、そしてビデオメディアの発祥地である日本など各地でビデオをめぐる活発な創作活動と文化交流が展開されました。そこに、商業映画とも実験映画とも異なる文脈をもつ「ビデオアート」というもうひとつの映像表現の文化が形成されていったのです。

「ヴァイタル・シグナル」は、日本とアメリカにおけるビデオアート史の最初の20年に焦点をあてます。日米を代表する38作家(組)による50タイトルを3日間全6プログラムで一挙に上映。他の芸術分野や科学技術と深く関わりあい、そして同時代の政治やマスメディアと激しく衝突しながら展開されたビデオアート草創期の軌跡を明らかにします。

これまでまとめては上映されることのなかった日米初期ビデオアート。そのパイオニアであった彼らの試みを、現在の視点からふりかえる絶好の機会としてごらんください。

Vital Signalsは、ニューヨークのビデオアーカイヴ機関EAI(エレクトロニック・アート・インターミックス)、横浜美術館、および日本のキュレーターや研究者たちの共同企画による国際巡回プログラムです。このVital Signalsというタイトルには、ビデオというメディアの特性＝「活発な電気信号」、そして当時の芸術文化におけるビデオアートの位置づけ＝「重要な兆候」というふたつの意味を託しています。

Section

2.5 Fri

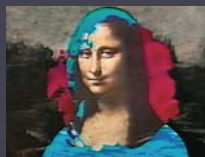
1

テクノロジー

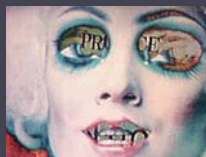
新しい視覚言語

program a ビデオ言語論

10:30~ 10作品 約57分



a-8



a-10

シンセサイザーや画像プロセッサなど、
新技術を用いた映像や音響の創出。
ビデオアート草創期、このメディアの技術的可能性を
探求するさまざまな試みが展開。

- a-1 ナムジュン・バイク [ベル研究所での電子映像実験] 1966年/4分40秒/白黒/サイレント
- a-2 CTG [コンピューター・ムービー No.2] 1969年/8分/白黒/サウンド/オリジナル:16mmフィルム
- a-3 ゲイリー・ヒル [電子言語学] 1977年/3分40秒/白黒/サウンド
- a-4 松本俊夫 [メタスタシス 新陳代謝] 1971年/8分/カラー/サウンド/オリジナル:16mmフィルム
- a-5 スタン・ヴァンダー・ビーク [ストロブ・オード] 1977年/11分/カラー/サウンド
- a-6 山口勝弘 [イメージモデレーター] ※インスタレーションの記録映像 1969年(再制作)/45秒/カラー/サウンド
- a-7 山口勝弘 [大井町附近] ※インスタレーションの記録映像 1977年/1分30秒/カラー/サウンド
- a-8 松本俊夫 [モナ・リザ] 1973年/3分/カラー/サウンド/オリジナル:16mmフィルム
- a-9 スタイナ&ウッディ・ヴァスルカ [腐蝕I] 1970年/1分57秒/カラー/サウンド
- a-10 安藤紘平 [オー!マイ・マザー] 1969年/13分/カラー/サウンド/オリジナル:16mmフィルム

program b 拡張する形式

14:00~ 9作品 約80分



b-1



b-9

収録内容をその場で再生できる
「リアルタイム・フィードバック」機能をはじめ、
ビデオ固有のさまざまな特性が、
映像制作の有り様を刷新していく。

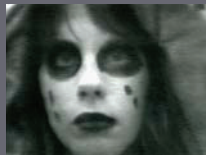
- b-1 ナムジュン・バイク (マース・カニングハム、チャールズ・アトラスとの共作)
[マース・バイ・マース・バイ・バイク:ブルーススタジオ] 1975-76年/15分49秒/カラー/サウンド
- b-2 山本圭吾 [Breath No.3] 1977年/6分/カラー/サウンド
- b-3 ジェイムズ・バーン [半透明] 1974年/2分15秒/白黒/サウンド
- b-4 飯村隆彦 [カメラ、モニター、フレーム] 1976年/17分15秒/白黒/サウンド
- b-5 ジョーン・ジョナス [左側 右側] 1972年/8分50秒/白黒/サウンド
- b-6 飯村隆彦 [オブザーバー/オブザーブド] ※抜粋版 1975-76年/8分45秒(オリジナル20分)/白黒/サウンド
- b-7 飯村隆彦 [男と女] 1971年/7分/白黒/サウンド
- b-8 ジェイムズ・バーン [両方] 1974年/3分38秒/白黒/サウンド
- b-9 山本圭吾 [Hand No.2] 1976年/7分50秒/白黒/サイレント

program C テレビの解放

10:30~ 8作品 約82分



c-2



c-8

当時の文化を支配していたテレビ。
アーティストや活動家は
テレビの特性を個人的な表現に取り込んで、
マスメディアや政治といった巨大な存在に対峙する。

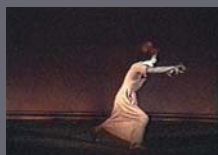
- c-1 ナムジュン・バイク&ジャド・ヤルカット [コマーシャルを待ちながら] 1966-72年/1992年/6分35秒/カラー/サウンド
- c-2 中谷美二子 [水俣病を告発する会—テント村ビデオ日記] 1971-72年/21分/白黒/サウンド
- c-3 松本俊夫 [マグネティック・スクランブル] ※映画《薔薇の葬列》より 1968年/30秒/白黒/サイレント
- c-4 デイヴィッド・コート [メーデー・リアルタイム] ※抜粋版 1971年/8分30秒(オリジナル59分45秒)/白黒/サウンド
- c-5 ビデオアース東京 [橋の下から] 1974年/13分/白黒/サウンド
- c-6 ダラ・バーンバウム [テクノロジー/トランスフォーメーション:ワンダーウーマン] 1978-79年/5分50秒/カラー/サウンド
- c-7 クリス・バーデン [TVコマーシャル 1973-77] 1973-77年/2000年/3分46秒/カラー/サウンド
- c-8 TVTV [あと4年(ニクソン再選運動の記録)] ※抜粋版 1972年/23分6秒(オリジナル61分28秒)/白黒/サウンド

program d 共有される記憶

14:00~ 7作品 約48分



d-1



d-7

個人の日常から歴史的イベントまで、
撮影者はカメラを媒介してあらゆる被写体と
その場の経験を共有し、残された映像は
不特定多数の人々の記憶のなかに共有されていく。

- d-1 久保田成子 [ヨーロッパ・オン・1/2インチ・ア・デー] ※抜粋版 1972年/8分30秒(オリジナル30分48秒)/白黒&カラー/サウンド
- d-2 中島興 [マイ・ライフ] ※抜粋版 1976-92年/5分(オリジナル22分)/白黒/サウンド/オリジナル:2チャンネルビデオインスタレーション
- d-3 アント・ファーム [アント・ファームの汚れた皿] 1971-2003年/8分30秒/白黒/サウンド
- d-4 アラン・カブロー [Hello] 1969年/4分45秒/白黒/サウンド
- d-5 シャーリー・クラーク [ティー・ビー・ビデオ・スペース・トループ パート1] 1970-71年/4分50秒/白黒/サウンド
- d-6 中谷美二子 [老人の知恵—文化のDNA] 1973年/10分30秒/白黒/サウンド
- d-7 ビデオインフォメーションセンター [ラ・アルヘンチーナ頌] ※抜粋版 1977年/5分(オリジナル70分)/カラー/サウンド

program e ビデオと行為

10:30~ 8作品 約74分



e-5



e-7

1960年代以降、「行為」そのものを作品にとりこんでいったアーティストたち。そして彼らにとって格好のメディアであったビデオ。さまざまな行為の痕跡が映像に刻まれていく。

- e-1 かわなかのぶひろ [キック・ザ・ワールド] 1974年/15分/白黒/サウンド
- e-2 山口勝弘 [Eat] 1972年/1分30秒/白黒/サウンド
- e-3 マーサ・ロスラー [キッチンの記号論] 1975年/6分9秒/白黒/サウンド
- e-4 今井祝雄 [ビデオ・パフォーマンス1978~1983] 1978-83年/15分35秒/カラー/サウンド
- e-5 デニス・オッペンハイム [アспен・プロジェクト/圧縮-シダ(顔)] 1970年/5分22秒/カラー/サイレント
- e-6 ウィリアム・ウェグマン [作品選集1] ※抜粋版 1970-72年/8分(オリジナル30分38秒)/白黒/サウンド
- e-7 ジョン・バルデッサリ [アートの作法:葉巻辞典] ※抜粋版 1973年/6分(オリジナル12分54秒)/白黒/サウンド
- e-8 小林はくどう [ラブス・コミュニケーション] 1972年(1980年再制作)/16分/カラー/サウンド

program f ビデオと身体

14:00~ 8作品 約64分



f-2



f-7

パフォーマンスの記憶に活用されたビデオ。それは単なる記録を超え、時間的・空間的・造形的な加工・操作によって、パフォーマーの身体表現を拡張・純化させていく。

- f-1 ヴィト・アコンチ [粉/息] 1970年/3分/カラー/サイレント/オリジナル:スーパー8フィルム
- f-2 ボール・マッカーシー [黒と白のテープ] ※抜粋版 1970-75年/5分(オリジナル32分50秒)/白黒/サウンド
- f-3 村岡三郎+川口龍夫+植松圭二 [映像の映像-見ること] 1973年/12分30秒/白黒/サウンド
- f-4 ジョーン・ジョナス [オーガニックハニーの垂直回転] 1973-99年/15分15秒/白黒/サウンド
- f-5 出光真子 [おんなのざくひん] 1973年/10分50秒/白黒/サウンド
- f-6 ブルース・ナウマン [ピンチネック] 1968年/2分/カラー/サイレント/オリジナル:16mmフィルム
- f-7 アンテ・ボザニッチ [アイ・アム・ザ・ライト] 1976年/3分57秒/白黒/サウンド
- f-8 和田守弘 [認知構造・表述] ※抜粋版 1975年/10分(オリジナル20分)/カラー/サウンド